

今治歴史散歩

大成経凡

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第27回は、先人が経験した今治地方の水災害を、近世・近代の資料などを紐解き、歴史散歩したいと思います。

第27回 今治水災史こぼれ話

●『今治拾遺』などが伝える水災史

今治地方の藩政史を伝える文献に『今治拾遺』(今治市／1988)があります。これは、今治藩最後の家老・服部正弘が明治時代に編纂した資料を活字化したもので、歴代藩主の事績とともに、治世下にあった様々な出来事が記されています。中でも災害は、藩財政の根本をなす年貢米の収穫や領民の暮らしに直結するため、その被害状況や対策措置は公文書として廃藩まで残されてきたのでしょうか。『今治拾遺』で頻繁に登場する災害の多くは、暴風雨・洪水・高潮など水災にかかわるもので、多くの出来事が記されています。

享保7（1722）年6月の暴風雨は、蒼社川・浅川の堤防を決壊させ、蔵敷村を水浸しにし、辰ノ口橋が流されるなど、城下町の被害も大きかつたようです。潰家は480軒（民家278軒・牛馬屋106軒など）あり、11月には幕府へ城郭破損箇所修築願いも提出されています。蒼社川は東三方ヶ森を水源とする領内第一の大川でしたが、頻繁に洪水で堤防が決壊しては平野部の田畠を水浸しにし、建物を流すなどしました。

『今治拾遺』の補完資料に、国分庄村屋加藤家と大浜庄村屋柳原家の資料を活字化した『国府叢書』(今治市／1987)、『大浜村柳原家文書』(今治市／1989)があります。『国府叢書』によると、享保15（1730）年8月の暴風雨では、本田・新田に高潮による汐入が見られ、損毛2万7603石の被害でした。本田の石高が3万5000石の今治藩にとって甚災といえるもので、水災は海からも襲ってきたのです。

●下見吉十郎と甘藷地蔵

享保17（1732）年の梅雨では、長雨によるウンカの大発生が稻に被害を与え、西国諸藩は『享保の大飢饉』に見舞われています。今治藩は例年の作柄指数の16%しか収穫できず、餓死者113



蒼社川と權現山（鴨部橋付近）



下見吉十郎をまつる甘藷地蔵
(向雲寺境内／県指定史跡)

名を出し、藩士の給与をカットしています。

被害の一一番大きかった松山藩は、収穫高がゼロに等しく、餓死者を5,705名も出して、藩主が幕府からお咎めを受け謹慎するほどでした。この時、松山領内で餓死者を出さなかつたとされる大三島では、サツマイモが非常食として効果を発揮しました。これを島に伝えた下見吉十郎は甘藷地蔵としてまつられ、上浦町瀬戸の向雲寺などでは今もその功績を称えています。

●河上安固と宗門掘

一方、蒼社川の改修工事で指揮をとった治水の功労者に河上安固がいます。今治藩では、享保4年(1719)3月に蒼社川の瀬掘普請をしたことが『国府叢書』に記され、同19(1734)年2月に実施した瀬掘では安固の父・儀右衛門が藩から賞辞を賜ったと『今治拾遺』は伝えます。

瀬掘とは、川底に堆積した砂礫を取り除き、川の容積を増して水勢を抑えるというもので、採取した砂礫は堤防の嵩上げに使用されました。この作業には、蒼社川の恩恵を受ける平野部の農村などから、宗門改帳(寺が管理する檀家名簿)に記された15歳から60歳までの男性が駆り出され、頓田川でも実施されました。この宗門掘、を巧みに利用し、安固は勘定目付として宝曆元年から同13年(1751~1763)に及ぶ大事業に挑むことになります。

安固は、高野村から城南河口部への流路の整備(付替え?)に腐心します。高橋村の権現山に登って工事を差配した上で、その腰掛石が大須伎神社境内に今も残されています。安固の墓は、先祖が大山祇神社の三島大祝氏の分流にあたることで、同氏鳥生屋敷跡(祇園町2丁目)の實法寺近くにあります。

廃藩後も瀬掘は続けられますが、明治26(1893)年10月の風水害で蒼社川の堤防数か所が決壊します。海南新聞(同月22日付)が伝えるところでは、このとき島しょ部・山間部を含めた今治地方(越智郡)全体で

75名の死者があったようです。暴れ川が猛威を振るう度に、安固の土功は喧伝され、治水への関心を誘いました。

●服部長七が手がけた今治海岸護岸

今治港の美保町海岸に、明治20(1887)年に工費8万円を要して築かれた波除石垣が数百mにわたって現存します。これは高潮対策で築かれたもので、手がけたのは人造石工法(長七たたき)の発明者・服部長七でした。コンクリート工法が普及する以前の土木遺産として、高潮の教訓を今に伝えています。



服部長七の波除護岸(今治港/美保神社付近)



河上安固の腰掛石(大須伎神社境内)